はじめに

本講義は東大をはじめとした難関国公立大学合格を目標とする講座です。

直前期の現代文の勉強で重要なのは、「今まで習ったことができるようになっているかを確認すること」です。習っていないことは本番ではできません。今まで考えたことがないものが、本番で考えられるわけもありません。

そこで、直前期では

① **「読解法」**
② **「設問解法」**

という2点を重点的に確認していくことになります。

本講義では難関国公立大の最新の過去問を用いて、今まで学んできた「読解法」と「設問解法」が使えるものになっているか、最終チェックを行います。ですから、「できるからやらなくても良い」とは考えないでください。「できるようになったことを再確認する」というつもりで、臨んでください。

この冬、みなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

① **文法**
② **構文**
③ **論理**

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係からなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「４つの言葉のルール」と「４つの言葉の使い方」とします。

・**「でない」という否定**
・**「かつ」という連言**
・**「または」という選言**
・**「ならば」という条件法**

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も４つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

柳生　好之

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ講義を受けるだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」や「傍線部」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして設問に解答してください。

冬期講習では「制限時間あり」で60％を目標として解答してください。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。

この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　問題を解く。解答の根拠をメモしておく。

Ⅱ　講義について

映像授業を受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、「復習タイム」に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答を書く」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。**ただし、本文に線を引くのは構いません。**

講義ポイント

講義中はメモを取らない。説明や図は講義後ノートに書く。

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント　**復習ポイントを覚える。問題を解き直す。**

難関国公立大 現代文　目次

第一講……p.8
第二講……p.15
第三講……p.27
第四講……p.36

第一講　傍線部の問題ファイナルチェック　35分

次の文章を読んで問いに答えよ。

音に対する感受性の深さ、東南アジア各地、ことに山間辺地に住む少数民族をたずねて気づくこと、驚くことの一つはこれである。

　ボルネオ内陸に住むイバン族の若者と川ぞいの道を歩いていたときのこと、かれはふと足をとめてこういった。「この川の名はスンガイ・トゥビ、川上の流れの音がコトコトと聞こえてくるでしょう、あの音が、この川の名になったのです」と。

　私はそのとき、わが国の「風土記」のなかの地名起源の説話を聞いているような、自然と文化が一つになって息づき、そこにものの名が誕生する現場に立ちあっているような、不思議な感動にとらえられたことを覚えている。

　イバン族の村では、朝ごとにその日一日分の米を立杵（たてぎぬ）、立臼を使って精米する。かれらの臼は底の部分にしかけがあって、臼をつく杵の力が床下の腕木に伝えられ、その腕木が同じく床下に吊りさげられた長板をたたく、

という構造になっているのである。だから、臼をトンとたたくと、床下の長板が打たれてトン　トン　トンと鳴る。腕木はいくぶん弾力性をもっているので、杵の音が反復、(1)ゾウフクされて響くのである。(ア)臼という生活道具が、ここでは同時に楽器でもあったのである。

　朝ごとにつく臼の音が、そのあたり一面にこだまする。その音を聞いて働く女性たちがたのしくなり、村びとがたのしくなる。それだけではない。この心地よい音は、もともとは、屋根裏部屋の大籠のなかにいる稲魂（いなだま）、つまり稲の神を喜ばせるためだったのである。眼（め）に見えない神をよろこばせる。そのためには心地よい音が、音楽が必要だったのである。

　マレー半島の中部、ベラ湖のほとりにスムライ族という民族が住んでいる。私はかつてこの民族をたずねて、ブバリンという名の奇妙な道具を見た。それは一言でいえば二枚羽根のプロペラで、その両端に竹笛がついていた。羽根の長さはそれぞれ約一メートル、プロペラは支架によって支えられ、風に向かって自由に向きを変えるように工夫されていた。

　村びとの話によると、村のなかでもっとも高い木の梢（こずえ）にブバリンをとりつけると、風とともにブーン　ブーン　と音を立てる。この音によって、遠方の森のなかにいる狩人（かりゅうど）が自分の村の所在を知る、ということであった。(イ)音の灯台ということであろうか。

村びとの説明はそうなのであるが、私としては若干の疑いを残している。いくら森のなかとはいえ、先祖代々同じ土地に住んでいる人間が、道に迷うなどということがあるだろうか。私には考えられないのである。

　そうなってくると、ブバリンの音は何を意味するのだろうか。ひょっとすると、それは他界への信号であり、また、他界からの呼びかけなのではなかろうか。いずれにしろ、この奇妙な道具、道具であると同時に楽器であるものの発する音、そのうなり声のなかに、もっともっと近づき、耳をすませてみたいのである。

　われわれは民族の文化を機能的に分析し、合理的に解釈することに慣れているけれども、実は、かれらの文化のなかにはわれわれの想像を超える、異次元の世界が映っていたかもしれないのである。

　バリ島のあの怪物のような凧（たこ）、ラヤン（凧）、ベベアン（魚）にしても同じことである。魚をかたどった墨色の凧が、昼となく夜となく、天空高くあがって低いうなり声をあげている。あの声は、よくいわれているように、単なる魔よけなのであろうか。それは魔を⑵ハイジョするための道具なのだろうか。そうではなくて魔の世界との交流、交感、共存が、あの奇怪な音によって、不思議なうなり声によって、果たされていたのではなかろうか。

かつてイバン族の村に(3)タイザイしていたとき、村長のカロンさんがさまざまな鳥、けものの声を、驚くほど上手に真似（まね）てみせてくれたことがある。

その声をかならず録音して帰ろうと思っていて果たさなかったのであるが、カロンさんの声を聞いているうちに、(ウ)声によって、人間の世界と野生の世界との交流が、二つの世界の共存が、表面的にではなく、人間の文化を超えた深層において成就されていることに感動したのである。

われわれは日ごろ、言葉という眼に見えない(4)アミメ、言葉というクモの巣のとりこになって、局限された、不自由な生活を強いられているのであるが、実は、言葉の向こうに声があり、声の向こうに音があり、さらにその向こう側に、音以前の世界があったのではないか。その音以前の世界から、音が生まれ、音が誕生し、言葉がよみがえってくるのではなかったろうか。

われわれ人類学の徒の野外調査、つまりフィールドワークも、結局は「奥の細道」をたどる歩みと同じであって、常に、(エ)なんとかして「岩にしみいる声」を聞きたいと思っているのである。その声、その音のなかに、荘厳な世界を(5)コンリュウしたいと思っているのである。

（岩田慶治「音・時・言葉」による）

問㈠　傍線の箇所⑴⑵⑶⑷⑸の片仮名を適切な漢字に書き改めよ。

問㈡　傍線の箇所㈠に「臼という生活道具が、ここでは同時に楽器でもあった」とあるが、筆者はイバン族の「臼」に「楽器」としてのどのようなはたらきを見出したのか。本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問㈢　傍線の箇所㈡「音の灯台」とは、スムライ族の「ブバリン」に対するどのような比喩的解釈か。その内容を四十五字以内で説明せよ。

問㈣　傍線の箇所㈢に「声によって、人間の世界と野生の世界との交流が、二つの世界の共存が、表面的にではなく、人間の文化を超えた深層において成就されている」とあるが、「声」によって成就される「交流」や「共存」とはどのような状態か。本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問㈤　傍線の箇所㈣に「なんとかして『岩にしみいる声』を聞きたいと思っている」とあるが、ここで筆者はどのような態度によってフィールドワークをおこなおうとしているのか。本文全体の趣旨をふまえて七十字以内で説明せよ。

問㈠

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

問㈡

問㈢

問㈣

問㈤

第二講　新傾向の問題ファイナルチェック　40分

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

ノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センという学者がいる。彼は、①新しい貧困論を生み出したことで知られている。彼の貧困論は、選択できる自由の問題と深く関わっている。

センは「貧困はたんに所得の低さというよりも、基本的な潜在能力が奪われた状態と見られなければならない」と主張する。それは「所得の低さ以外にも潜在能力に――したがって真の貧困に――影響を与えるものがある（所得は潜在能力を生み出す唯一の手段ではない）」からだ。また「貧困とは受け入れ可能な最低限の水準に達するのに必要な基本的な潜在能力が欠如した状態として見るべきである」とも述べている。

潜在能力（capability）とはセン独自の概念である。それは「十分に栄養をとる」「衣料や住居が満たされている」という生活状態（これをセンは「機能」と言う）に達するための個人的・社会的自由を指している。たとえばセンは、次のように言う。「腎臓障害で透析を必要とする人は、所

得こそ高いかもしれないが、それを機能に変換する際の困難を考慮すれば、この人の経済手段（つまり、所得）は依然として不足していると言える。貧困を所得だけで定義するのであれば、所得からどのような機能を実現できるかという潜在能力を抜きにして、所得だけで見るのでは不十分である。貧困に陥らないために十分な所得とは、個人の身体的な特徴や社会環境によって異なるのである。」

　腎臓障害を抱えて透析治療が必要な人Aは、その障害を持たない人Bと同じ暮らしをしようとすれば（同じ「機能」を達成しようとすれば）、そのハンディキャップのために、Bよりも多くの所得を必要とする。それゆえ、②AはBより高い所得を得ているのに、Aのほうが不自由な暮らしを強いられる、という場合がある。この不自由さを、センは「潜在能力の欠如」と表現する。

　こうも述べている。

「潜在能力の欠如は、世界におけるもっとも富裕な国々においても驚くほど広く見られる。（中略）たいそう繁栄したニューヨーク市のハーレム地区の人が四〇歳以上まで生きる可能性は、バングラデシュの男性よりも低い。これは、ハーレムの住人の所得がバングラデシュ人の平均的な所得よりも低いからではない。この現象は、保健サービスに関する諸問題、行

き届かない医療、都市犯罪の蔓延など、ハーレムに住む人々の基礎的な潜在能力に影響を与えているその他の要因と深く関連している。」

　ニューヨークのハーレム地区住人の所得がバングラデシュ人の平均所得を上回っていることは、日本のホームレスの人たちの所得がアフリカの最貧国の平均所得を上回っていることと同様に、疑いの余地がない。国連が「絶対的貧困」だという一日一ドル以上の所得を得ているホームレスの人は、少なからずいるだろう。しかしそれは、貧困ではない、ということを意味しない。なぜなら、そこには生活上の望ましい状態（機能）を達成する自由（潜在能力）が欠けているからだ。

　たとえ、より所得の少ない人に比べれば、いくらか多い所得を得ていたとしても、その所得によって望ましい状態を得られる[ア]ホウト（選択の自由）を持っていなければ、その人の潜在能力は奪われた状態にある。医師のいない[イ]リトウでいくらお金を持っていたとしても、満足に医療にかかることができなければ、その人はすぐに医療にかかれる環境に暮らす人たちよりも「満足な医療にかかることができる」という「機能」から遠い。それは、お金がなくて国民健康保険料を長く滞納した結果、*注資格証を発行されて事実上医療機会を奪われてしまった人たちと同じである。医療にかかるという選択肢が奪われている、という点で、両者はともに基本的

な潜在能力を奪われた状態にある、と言える。それが「貧困」だ、とセンは言う。

「潜在能力の欠如」(自由に選択できないという不自由)は、個人的な要因であると同時に、社会的・環境的な要因でもある。ニューヨークのハーレム地区でたまたま七〇歳や八〇歳まで生きる人がいるからといって、「他の人たちには努力が足りない」と、平均寿命の短さを早く死んでしまう人たちの自己責任で裁断することは妥当ではない。必要なのは、その地域や個人の諸条件を改善して、長寿を可能にする環境を整えることだ。

それゆえ「開発／発達(development)」とは、単に所得を上げるだけでなく、望ましいさまざまな生活状態(機能)に近づくための自由度(潜在能力)を上げていくことだ、とセンは言う。「開発／発達とは、人々が享受するさまざまの本質的自由を増大させるプロセスである」「開発／発達の目的は不自由の主要な原因を取り除くことだ。貧困と圧政、経済的機会のゥ乏しさと制度に由来する社会的窮乏、公的な施設の欠如、抑圧的国家の不寛容あるいは過剰行為などである」と。

私自身は、ホームレス状態にある人たちや生活困窮状態にある人たちの相談を受け、一緒に活動する経験の中で、センの「潜在能力」に相当する概念を〝溜め〟という言葉で語ってきた。

③〝溜め〟とは、溜池の「溜め」である。大きな溜池を持っている地域は、多少雨が少なくても エ慌てることがない。その水は田畑を オ潤し、作物を育てることができる。逆に溜池が小さければ、少々日照りが続くだけで田畑が干上がり、深刻なダメージを受ける。このように、溜めは、外界からの衝撃を吸収してくれるクッション（緩衝材）の役割を果たすとともに、そこからエネルギーを汲み出す諸力の源泉となる。

〝溜め〟の機能は、さまざまなものに備わっている。たとえば、お金だ。十分なお金（貯金）をもっている人は、たとえ失業しても、その日から食べるに困ることはない。当面の間そのお金を使って生活できるし、同時に求職活動費用ともなる。落ち着いて、積極的に次の仕事を探すことができる。このとき貯金は〝溜め〟の機能を持っている、と言える。

しかし、わざわざ抽象的な概念を使うのは、それが金銭に限定されないからだ。有形・無形のさまざまなものが〝溜め〟の機能を有している。頼れる家族・親族・友人がいるというのは、人間関係の〝溜め〟である。また、自分に自信がある、何かをできると思える、自分を大切にできるというのは、精神的な〝溜め〟である。

あるときこの〝溜め〟の話をしていたら、取材していた外資系通信社の記者が「自分にも〝溜め〟があったんだな」と言い出した。聞けば、前の

会社でリストラに遭って二年間失業状態だったと言う。フリーライターとして仕事をしていたが、収入は非常に少なかった。しかし、ある友人が今の会社を紹介してくれて、なんとかまたこうやって取材ができている。自分の場合は、三年間失業していられるだけの金銭的な〝溜め〟があり、また仕事を紹介してくれる友人という人間関係の〝溜め〟があったから、また好きなジャーナリズムの世界で仕事をしていられる、と。

　また、あるとき講演後の(カ)キュウケイ時間に一服していたら、聴講者の一人が寄ってきて「自分の兄も大変なことになりましてね」と話し出した。聞けば、ヤミ金に手を出してしまって一家離散の憂き目に遭い、もう今どこで何をしているのかわからないと言う。取立て屋たちは「息子の不始末の(キ)尻拭いをするのは親の役目だ」と八〇歳になる母親を責め始めたが、自分が知り合いの法律家に頼んで間に入ってもらい、親にまで被害が広がるのはなんとか防げた、と話していた。このとき、その母親にとって法律家を紹介してくれる彼のような息子がいたことは、重要な人間関係の〝溜め〟である。

　フリーターや主婦パートで仕事が不安定であっても、親や(ク)ハイグウシャと同居していれば、すぐに生活には困らない。親が(ケ)膨大な教育費をかけてくれれば、大学にも通える。このとき、本人はそれぞれの〝溜め〟

を持っていることになる。

　逆に言えば、貧困とは、このようなもろもろの〝溜め〟が総合的に失われ、奪われている状態である。金銭的な〝溜め〟を持たない人は、同じ④失業というトラブルに見舞われた場合でも、深刻度が全然違ってくる。ただちに生活に窮し、食べる物に事欠くために、すぐに働くところを見つけなければならない。職種や雇用条件を選んでいる暇はない。窮乏度がひどくなれば、月給の仕事を選ぶか、日払いの仕事を選ぶかという選択肢は、事実上存在しなくなる。月給仕事を選ぶためには、最初の給料が入る一ヵ月または二ヵ月後まで生活できるだけの〝溜め〟（貯金、あるいは親元に住んでいて衣食住に事欠かないなど）が必要になるからだ。

　三層（雇用・社会保険・公的コフジョ）のセーフティネットに支えられて生活が安定しているとき、あるいは自らの生活は不安定でも家族のセーフティネットに支えられているとき、その人たちには〝溜め〟がある。逆に、それらから排除されていけば、〝溜め〟は失われ、最後の砦（とりで）である自信や自尊心をも失うに至る。〝溜め〟を失う過程は、さまざまな可能性から排除され、選択肢を失っていく過程でもある。

＊資格証――被保険者資格証明書。納付期限後一年を経ても国民健康保険料を納めず、保険証の返還を求められた際、市区町村から交付される。この証明書で受診した場合、医療費の全額を自己負担することになる。

（湯浅誠『反貧困』による）

一　傍線部ア〜コの、漢字をひらがなに、カタカナを漢字にしなさい。

二　傍線部①「新しい貧困論」とあるが、センの「貧困論」の新しさについて説明した次の文の空欄に入る適切な語句を、本文中から抜き出して答えなさい。ただし、［ a ］には五字、［ b ］には四字の語句が入る。

センは貧困を単に［ a ］としてのみ捉えるのではなく、衣食住といった［ b ］の充足が実現されていないこととして捉えている。

三　傍線部②「AはBより高い所得を得ているのに、Aのほうが不自由な暮らしを強いられる」について、本文中で言及されている「腎臓障害」のような健康上の問題とは別の事例を考えて挙げなさい。

四　傍線部③「〝溜め〟とは、溜池の「溜め」である」について、次の問いに答えなさい。

(1)筆者の言う「〝溜め〟」と「溜池の「溜め」」のあいだにはどのような共通性があるのか、三十五字以内（句読点を含む）で説明しなさい。

(2)「潜在能力」以外の語で、ここに言う「溜め」を言い換えたものとして最も適切なものを本文中から抜き出しなさい。

五　傍線部④の「失業というトラブル」に備えるなら、具体的にどのような「〝溜め〟」を持つことが理想的か。本文全体の内容を踏まえ、三点に分けて説明しなさい。

六　本文前半で繰り返し引用されるアマルティア・センの貧困論と、本文後半で提示される筆者の思考は、どのような点で重なるのか。「潜在能力」および「〝溜め〟」という語を使わずに説明しなさい。

一

ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ

二

a

b

三

四

(1)

(2)

五

六

第三講　複数テキストの問題ファイナルチェック　40分

次の文章は、十七世紀フランスの思想家パスカルが書き残したものを集めた『パンセ』の一節についての解説です。これを読んで後の問いに答えなさい。なお、二字下げてある部分は、『パンセ』からの引用です。

パスカルにとって、人間の自己愛の第一の特性は、欠陥だらけである自己の真実の姿を、自分にも他人にも隠すことであった。その他人が私の欠点を見ぬき、それを指摘してくれる場合、彼は公正であり、その指摘は私の益になるはずだが、私はそのようなふるまいに嫌悪感を抱く。私は彼が正義であるよりは、彼が不正であっても、私を喜ばせてくれることを望むからである。パスカルは、このような私の悪を「(a)自発的錯誤」と呼んでいる。

　たしかに、欠陥に満ちていることは悪ではあろう。しかし、欠陥に満ちていて、それを認めようとしないのは、なお大きな悪である。なぜなら、それは、そこに自発的な錯誤という悪をさらに加えることに

なるからだ。

私の「自発的錯誤」への欲求は、すぐに叶（かな）えられる。なぜなら、相手もまた私に嫌われるよりは、私に好かれるほうが心地よいからだ。正直に本音を告げて相手を不快にするより、世辞でその場をしのぐほうが心理的な(1)フタンも小さい。

以上のことから、人がわれわれから愛されることになんらかの利点があるような場合、その人は、われわれにとって不快だとわかっている世話を焼くのを避けるようになる。人はこちらが思うとおりに遇してくれるものだ。われわれは真理を憎んでいるので、人はわれわれから真理を隠してくれる。われわれがほめてほしいときには、人はほめてくれるものだ。われわれはだまされるのが好きなので、人はだましてくれるのだ。

また、同じように、私も他者に対して、その真実の姿を暴き立てたりはしない。とりわけ相手が目上の人や権力者である場合には、私は相手の気分を害さないように細心の注意を払う。相手のことを考えれば、ときには

言動を(2)キョウセイしてやることも必要なはずなのに、私は相手をもっぱらほめそやし、うまく取り入って、あわよくば身分や富の保証を得ようとする。こうして、高位者であればあるほど、それだけ多くの人々の阿諛追従（あゆついしょう）を浴び、決しておのれの真実の姿を見つめることはない。

そのようなわけで、幸運によって世間で高い地位に恵まれる者は、その地位が高ければ高いだけ、真理からますます遠ざかることになる。なぜなら人は、相手から好まれることが有利になり、嫌われることが不利になる場合、その相手を傷つけることを恐れるからだ。ある君主がヨーロッパ中の笑いものになっているのに、本人だけが知らないということがあったとしても、私は驚かない。真理を告げると、告げられた相手には益をもたらすが、告げる側は、相手に嫌われてしまうので、損をこうむることになる。そこで、君主のそばで生活する人々は、自分が仕える君主の益よりも自分の益のほうを尊重するので、自分たちが損をしてまで相手に益を与えようなどとは考えないのである。

したがって、私と他者は相互に錯誤を求め、与え合っている。第一に、私は自分をだましてくれる他者のおかげで、自分の欠陥を直視せず、美化

された姿を真実だと思いこむ。第二に、私も同様に、他者の短所には目をつむり、相手に自分が実際以上に優れた存在であると思いこませる。このとき、私も他者も、互いに相手に感謝し、それに報いようとさえするが、実は両者とも、そのようにふるまうのは、(b)相手の益ではなく、自分の益のためにすぎない。

　こうして、人間の生涯とは、たえざる幻想にほかならない。人は互いにだましあい、互いにへつらいあっているにすぎないのだ。われわれがいるところで、いないときと同じようにわれわれについて語る者は、誰もいない。人間同士のつながりは、こうした互いの欺瞞（ぎまん）の上にしか成り立たない。もし誰もが、自分のいないところで友人が自分について語る内容を知っていたとしたら、たとえその友人がいかに誠実に、公平に語っていたとしても、ほとんどの友情は持続しないだろう。

　人々は互いに相手の偽りの姿を真実と信じこませようと努める。社会生活を成り立たせているのは、このような普遍的な相互欺瞞である。この現象が安定的に機能するかぎりにおいて、社会は平和に維持されるだろう。だが、この共同幻想はきわめてもろいものである。なぜなら、私はAの前

ではＡをほめるが、Ａ以外の人物の前では、つい油断してＡの欠点について語るからだ。それは即座にＡに伝わり、相互欺瞞が(3)ハタンする。

ところで、その私の本音は、単なる悪口ではなく真実を含んでおり、本来ならＡが聞き入れればＡの益になるはずのものである。だが、Ａは私に感謝するどころか、敵意を向ける。真実はこうして、共同体の(4)チツジョにひびを入れる。

つまり、人間は、自分自身に対しても、他人に対しても、偽装、虚偽、偽善にほかならない。だから、人から真実を言われることを望まないのであり、他人に対しても真実を語らない。(c)正義と理性からかくも隔たったこのような傾きはすべて、人間の心に生来根ざしているのである。

人間の邪悪なありようを描くとき、パスカルの筆はひときわ冴(さ)えわたる。「(5)スウコウなる人間嫌い」（*ヴォルテール）と呼ばれるゆえんである。

（山上浩嗣『パスカル『パンセ』を楽しむ』による）

＊ヴォルテール――十八世紀フランスの哲学者・文学者。

問一　傍線部(1)〜(5)を漢字になおしなさい。

問二　傍線部(a)「自発的錯誤」とは、どのようなことをいうのか、わかりやすく説明しなさい。

問三　傍線部(b)「相手の益ではなく、自分の益のためにすぎない」とは、どのようなことをいうのか、本文中で述べられている「益」には二通りの意味があることをふまえながら、わかりやすく説明しなさい。

問四　傍線部(c)「正義と理性からかくも隔たったこのような傾き」とあるが、この「傾き」とはどのようなものか、またそれはなぜ「正義と理性」から隔たっていると見なされるのか、わかりやすく説明しなさい。

問一

(1)	(4)
(2)	(5)
(3)	

問二

問三

問四

第四講　全体把握問題ファイナルチェック　60分

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

「カオスの縁(ふち)」という言葉をご存知だろうか？　この「カオスの縁」とは、一九六〇年代から行われているセル・オートマトンと呼ばれるコンピューター上のプログラムを使った研究が端緒となり提唱された概念である。とても大雑把に言えば、二つの大きく異なった状態（相）の中間には、その両側の相のいずれとも異なった、複雑性が非常に増大した特殊な状態が現れる、というようなことを指している。

身近なイメージで言えば、〝水〟を挙げられるだろうか。ご存知のように、水は気体・液体・固体という三つの形態をとる。たとえば気体の水蒸気は、水分子の熱運動が大きくなり、各分子が分子同士の結合力の束縛から放たれ、空間の中で自由気ままに振舞っている非常に動的な姿である。一方、氷は水分子同士が強固に結合し、各分子は自身が持つ特性に従って規則正しく配列され、理にかなった秩序正しい形を保っている静的な状態だ。

その中間にある液体の、いわゆる〝水〟は、生命の誕生に大きく[a]コウ

ケンしたと考えられる、柔軟でいろんな物質と相互作用する独特な性質を多数持っている。水蒸気とも氷ともかなり異なった特性である。この〝水〟の状態で水分子が存在できる温度範囲は、宇宙のスケールで考えるなら、かなり狭いレンジであり、実際〝水〟を湛（たた）えた星はそうそう見つからない。巨視的に見れば〝水〟は分子同士が強固に束縛された氷という状態から、無秩序でカオス的に振舞う水蒸気という状態への過渡期にある特殊な状態、すなわち「カオスの縁」にある姿と言えるのかもしれない。

　この「カオスの縁」という現象が注目されたのは、それが生命現象とどこかつながりを感じさせるものだったからである。生き物の特徴の一つは、この世界に「形」を生み出すことだ。それは微視的には有機物のような化学物質であり、少し大きく見れば、細胞であり、その細胞からなる我々人間のような個体である。そして、さらに巨視的に見れば、その個体の働きの結果できてくるアリ塚であったり、ビーバーのダムであったり、東京のような巨大なメガロポリスであったりする。

　しかし、こういった生物の営みは、ア自然界ではある意味、例外的なものである。何故なら、この世界は熱力学第二法則（エントロピー増大の法則）に支配されており、世界にある様々な分子たちは、より無秩序に、言葉を変えればカオスの方向へと、時間と共に向かっているはずだからであ

る。そんなカオスへ向かいつつある世界の中で、「形あるもの」として長期間存在できるのは、一般的に言えば、それを構成する原子間の結合が極めて強いものであり、鉱物や氷といった化学的な反応性に乏しい単調な物質が主なものである。

ところが、生命はそんな無秩序へと変わりつつある世界から、自分に必要な分子を取り入れ、そこに秩序を与え「形あるもの」を生み出していく。その姿はまるで「カオスの縁」にたたずみ、形のないカオスから小石を拾い、積み上げているかのようである。また、その積み上げられる分子の特徴は、鉱石などと違い、反応性に富んだ物質が主であり、〝不動〟のものとして作り出されるのではなく、偶発的な要素に反応し、次々に違う複雑なパターンとして、この世に生み出されてくる。そして、それらは生命が失われれば、また形のない世界へと飲み込まれ、そこへと還（かえ）っていくのだ。それは分子の、この世界における在り方という視点で考えれば、〝安定〟と〝無秩序〟の間に存在する、極めて特殊で複雑性に富んだ現象である。

また、生命の進化を考えてみよう。進化は、自己複製、つまり「自分と同じものを作る」という、生命の持続を可能とする静的な行為と、変異、つまり「自分と違うものを作る」という、秩序を破壊する、ある種、危険を伴った動的な行為の、二つのベクトルで成り立っている。現在の地球上

に溢（あふ）れる、大きさも見た目も複雑さもその生態も、まったく違う様々な生命は、その静的・動的という正反対のベクトルが絶妙なバランスで作用する、その〝はざま〟から生まれ出てきたのだ。

　生命は、原子の振動が激しすぎる太陽のような高温環境では生きていけないし、逆に原子がほとんど動かない絶対零度のような静謐（せいひつ）な結晶の世界でも生きていけない。この単純な事実を挙げるまでもなく、様々な意味で生命は、秩序に縛られた静的な世界と、形を持たない無秩序な世界の間に存在する、イ<u>何か複雑で動的な現象</u>である。「カオスの縁」、つまりそのはざまの空間こそが、生命が生きていける場所なのである。

「生きている」科学にも、少しこれと似た側面がある。科学は、混沌（こんとん）とした世界に、法則やそれを担う分子機構といった何かの実体、つまり「形」を与えていく人の営為と言える。たとえば、あなたが街を歩いている時、突然、太陽がなくなり、真っ暗になってしまったとする。一体、何が起こったのか、不安に思い、混乱するだろう。実際、古代における日食や月食は、そんな出来事だった。不吉な出来事の予兆とか、神の怒りとして、恐れられてきた歴史がある。

　しかし、今日では日食も月食も物理法則により起こる現象であることが科学によって解明され、何百年先の発生場所、その日時さえ、きちんと予

測することができる。それはある意味、人類が世界の秩序を理解し、変わることない〝不動〟の姿を、つかんだということだ。何が起こったのか訳が分からなかった世界に、確固とした「形」が与えられたのだ。

　一方、たとえばガンの治療などは、現在まだ正答のない問題として残されている。外科的な手術、抗ガン剤、放射線治療。こういった標準治療に加えて、免疫療法、鍼灸（しんきゅう）、食事療法など[b]ダイタイ医療と呼ばれる療法などもあるが、どんなガンでもこれをやれば、まず完治するというような療法は存在しない。そこには科学では解明できていない、形のはっきりしない闇のような領域がまだ大きく広がっている。しかし、この先、どんなガンにも効果があるような特効薬が開発されれば、ガンの治療にはそれを使えば良い、ということになるだろう。

　それは、かつて[c]サイキンの感染症に対して抗生物質が発見された時のように、世界に新しい「形」がまた一つ生まれたことを意味することになる。このように人類が科学により世界の秩序・仕組みのようなものを次々と明らかにしていけば、世界の姿は固定され、新たな「形」がどんどん生まれていく。それは[ウ]人類にもたらされる大きな福音だ。

　しかし、また一方、こんなことも思うのだ。もし、そうやって世界の形がどんどん決まっていき、すべてのことが予測でき、何に対しても正しい

判断ができるようになったとして、その世界は果たして、人間にとってどんな世界なのだろう？　生まれてすぐに遺伝子診断を行えば、その人がどんな能力やリスクを持っているのか、たちどころに分かり、幼少時からその適性に合わせた教育・訓練をし、持ち合わせた病気のリスクに合わせて、毎日の食事やエクササイズなども最適化されたものが提供される。結婚相手は、お互いに遺伝子型の組合せと、男女の相性情報の膨大なデータベースに基づいて自動的に幾人かの候補者が選ばれる。

　科学がその役目を終えた世界。病も事故も未知もない、そんな神様が作ったユートピアのような揺らぎのない世界に、むしろ「息苦しさ」を感じてしまうのは、私だけであろうか？

　少なくとも現時点では、この世界は結局のところ、「分からないこと」に覆われた世界である。目をつぶって何かに、それは科学であれ、宗教であれ、すがりつく以外、心の拠(よ)りどころさえない。しかし、物理的な存在としての生命が、「カオスの縁」に立ち、混沌から分子を取り入れ「形」を作り生きているように、知的な存在としての人間はこの「分からない」世界から、少しずつ「分かること」を増やし「形」を作っていくことで、また別の意味で「生きて」いる。その営みが、何か世界に〝新しい空間〟を生み出し、その営みそのものに人の〝喜び〟が隠されている。そんなこ

とを思うのだ。

だから、世界に新しい「形」が与えられることが福音なら、実は「分からないこと」が世界に存在することも、また福音ではないだろうか。目をつぶってしがみつける何かがあることではなく。

「分からない」世界こそが、人が知的に生きていける場所であり、世界が確定的でないからこそ、人間の知性や「決断」に意味が生まれ、そして「アホな選択」も、また許される。エ<u>いろんな「形」、多様性が花開く世界</u>となるのだ。それは神の摂理のような〝真実の世界〟と、混沌が支配する〝無明の世界〟とのはざまにある場所であり、また「科学」と、まだ科学が把握できていない「非科学」のはざま、と言い換えることができる空間でもある。

（中屋敷均「科学と非科学のはざまで」による）

㈠「自然界ではある意味、例外的なものである」（傍線部ア）とはどういうことか、説明せよ。

㈡「何か複雑で動的な現象」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。

㈢「人類にもたらされる大きな福音」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。

㈣「いろんな『形』、多様性が花開く世界」（傍線部エ）とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえて一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ（句読点も一字として数える）。

㈤傍線部ａ・ｂ・ｃのカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

ａ　コウケン　　ｂ　ダイタイ　　ｃ　サイキン

(四)

(三)

(二)

(一)

㈤
a
b
c

解答解説

第一講　解答

問㈠

(1)	増幅
(2)	排除
(3)	滞在
(4)	網目
(5)	建立

問㈡

杵で臼をたたく音が働く女性たちと村人を楽しませ、さらに稲の神である稲魂を喜ばせるはたらき。

問㈢

灯台の光が船乗りに港の所在を教えるように、ブバリンの音が狩人に村の所在を教えるという解釈。

問㈣

機能的に分析し、合理的に解釈する言葉の世界と、音以前の異次元の世界がつながっている状態。

問㈤

言葉や文化を機能的に分析し、合理的に解釈する文明社会の態度を自明視せず、分節されたた音以前の世界との交流、交感、共存を捉えようとする態度。

第二講　解答

一

ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
方途	離島	とぼ	あわ	うるお	休憩	しりぬぐ	配偶者	ぼうだい	扶助

二

a 所得の低さ

b 生活状態

三

Aは子沢山でその上年老いた両親も健在であり、扶養しなくてはならない家族が多い。そのため、Bよりも所得は多いのに、Aの方が不自由な暮らしを強いられる。

四

(1)

危機に陥ったとき、それを緩和し、乗り越える力を生み出す源泉となる。

(2)

セーフティネット

五

当面の生活や求職活動を可能にする貯金などの金銭的な〝溜め〟、頼れる家族・親族・友人がいるという人間関係の〝溜め〟、危機にあっても自信や能動性や自尊心を保ちうる精神的な〝溜め〟。

六

貧困とは単に金銭的な貧しさを意味するのではなく、望ましい生活状態を達成するための社会的・環境的な諸資源や可能性の欠乏であり、それが帰結する選択の自由の欠如であるとする点。

第三講　解答

問一

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
負担	矯正	破綻	秩序	崇高

問二

公正に欠点を指摘してくれる他人は自分の利益となる存在であるが、自分にも他人にも自分の欠陥を隠そうとする自己愛が人間にはあるので、その指摘には嫌悪感を抱き、自分を喜ばせてくれる不正の方を望むという誤りを犯してしまうこと。

問三

「益」には公正な立場から欠点を指摘してもらい短所を克服するという益と、自分が実際よりも優れたものであると思い込ませてもらったり、身分や富の保証が得られたりという益があるが、高位者が低位者に報酬を与え、低位者が高位者に追従するのは、前者の益ではなく後者の益のためだということ。

問四

「傾き」とは、人間同士のつながりが相互欺瞞により成り立つ幻想の中で生きる人間が生来有する傾向を表し、この互いの偽装や虚偽や偽善は、自分の利益のために相手の真実の姿を見抜いても指摘しようとはしない点で正義に反し、真実を伝えられることは自分の利益になることを理解せず、嫌悪感を抱く点で理性に反するから。

第四講　解答

㈠
自然界では、原子間の結合が強い物質以外は無秩序へと向かうが、生命は自然界から必要な分子を取り入れ秩序ある有機体を生み出すということ。

㈡
様々な生命は秩序を守って自己複製する行為と秩序を破壊する変異という行為を行いながら、偶発的な要素に反応して生み出されたということ。

㈢
人類が科学により混沌とした世界に次々と秩序や法則を与えていけば、正しい予測や判断が行えることになり、心の安寧が得られるということ。

㈣
生命が無秩序へ向かう世界において様々な秩序ある有機体に進化したのと同様に、人間の知の世界は、混沌とした世界に少しずつ秩序や法則が与えられて新しいものに更新されると同時に、確定的な秩序が与えられず様々な意味が生まれるものだということ。

㈤
a
貢献
b
代替
c
細菌

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。